

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 18 日現在

機関番号：32517

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23530754

研究課題名(和文) 保育所における1,2歳児担当保育者の疲労感と子どもの心身の安定に関する研究

研究課題名(英文) The study regarding the relationship between stress of nursery teacher in charge of 1 and 2 years old and stability of children at day-care center.

研究代表者

西 智子(NISHI, Tomoko)

聖徳大学・心理・福祉学部・教授

研究者番号：70383445

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円、(間接経費) 1,140,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は保育者の疲労が子どもの安定にどのように関係しているのかを保育者の仕事に着目し、保育の質を保ちながら子どもが安定して過ごすための条件を明らかにすることを目的としたものである。調査の結果、疲労は子どもの見方に影響し、的確な把握と状況の判断を阻害する要因となること、子どもの安定のためには疲労軽減を図ることが重要であることが明らかになった。軽減に取り組む際には、年代・雇用形態による違いを踏まえること等いくつかの軽減要因に関する事項も明らかとなった。保育の質を保つための適正なクラス規模の存在、職員構成・生活動線を考慮した保育体制の見直し等、保育現場で取り組むべき課題の根拠を得ることができた。

研究成果の概要(英文)：The objective of this study was to assece the relationship between nursery teacher's stress and children's stability focusing on nursery teacher's work,and to define the condition for promoting children's stability without decreasing day care quality. The results of primary and secondary research(approximately 7500 responses from nursery teachers)demonstrated that the nursery teacher's stress inhibited the ability to understand children's situation and judge the situation correctly,and suggested the stressor reduction is critical for children's stability.In addition,the results clarified the task to deal with on site for reducing stress factor:revision of daycare management considering staff composition(age,employment status,and so on)and traffic line of daily life,and ensuring of appropriate class size to keep day care quality.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：社会学・社会福祉学

キーワード：子どもの安定 保育者の疲労 疲労軽減 保育所 0.1.2歳児 仕事の改善 保育集団の規模

## 1. 研究開始当初の背景

少子化対策の一環として、待機児童ゼロ作戦が提唱され、保育所には量的拡大が求められてきた。2011年4月時点の待機児童25,556人の8割以上が低年齢児であり、0～2歳児保育の推進が図られ、定員の弾力化の施策のもと保育所は多くの子どもたちを受け入れていた。特に首都圏の待機児童は全体の7割を超え、1,2歳児で定員の25%増の子どもを入所させて対応している園もあった。一方、保育の仕事に対してはやりがいを感じているがやめたいと感じている保育者が全体の8割を超え特に6年目の保育者に顕著であり（全国保育士養成協議会2009年）、若年保育者の離職が現場での課題となっていた。

この様に少子化対策は現場の保育者の大きな負担のもとに取り組み、余裕のない保育の環境は保育者自身の自己研鑽へのゆとりを奪い、保育の質を守る努力を難しくさせていた。新待機児童ゼロ作戦は、保育サービスの質・量ともに充実・確保し推進するとしていたが、質の充実に関わる保育者の在り方について十分な研究がなされてきてはいなかった。保育者については、子どもとの関わり方を問うだけではなく、仕事全体から保育者の在り方を問い続けることが必要であり、保育の質を確保するために保育者の状態と子どもの状態を共に検討していくことが重要であるという視点から研究に取り組んできた。

## 2. 研究の目的

保育者の疲労感が子どもの心身の安定にどのように影響するのかを保育者の仕事、働き方に着目し、保育の質を保ちながら子どもが安心して過ごせるための条件を検証することを目的とした。具体的には保育者の疲労の原因を明らかにし、保育における子どもの安定と保育の質を左右する要因について明らかにするものである。

## 3. 研究の方法

質問紙による1,2次調査及び聞き取り調査を実施した。

[1次調査 その ]

(実施時期) H23年11月～12月

(調査対象) 待機児童の存在する首都圏の保育所5か所の0～2歳児担当保育者158名から回答を得る。

[調査項目] 3種類(保育者の属性・子どもの状態・保育者の状態)60項目

[1次調査 その ]

(実施時期) H24年5月

(調査対象) 地方都市の乳児保育者414名

(調査項目) 4種類(保育者の属性・0～2歳児保育の特性・時間別状況・保育に関する自由記述)22項目

更に地方都市2か所の保育園における聞き取り調査を実施した。(保育の工夫と環境)

[2次調査]

(実施時期) H24年10月～12月

(調査対象) H24年度4月現在待機児の多い東京・神奈川・千葉3県52区・市の認可保育所2,000か所に配布。927保育所7,290人回答(保育所回収率46.4%)

(調査項目) 8種類(保育者の属性・保育者の状態・0～2歳児保育の特性・保育の時間別状況・仕事のやりがい・子どもの状態・子どもが安定して過ごせる条件・0～2歳児保育に関する自由記述)全177項目である。

加えて東京の乳児保育担当保育士48名より子どもの安定を図る保育の工夫について話し合ってもらった。

[分析方法]

各分析は統計ソフト SPSS (Version18.0) を用いて行った。

## 4. 研究成果

1次・2次調査より示唆を得たことは、以下の点である。

(1) 子どもの心身の安定とその要因

保育者の多数は「笑顔が多い」「遊びに集中している」「他児とかかわる」「自ら意欲的

に食べ、着替える」「よく話をする」「ぐっすり寝る」といった子どもの状態を、子どもの心身の安定と捉えていることが明らかになった。また、「よく泣く」「すぐ怒る」「子ども同士のトラブルが多い」「保育者にベタベタする」「ごろごろしている」「眠そうである」等の状態を不安定と捉えており、現場の保育者が捉える子どもの安定・不安定状態の尺度を検証することができた。また、その状態を解消するために保育に取り組んでいることも示唆された。また、安定状態を支える事項を横断的に見ると、食事・睡眠が十分である。自分のペースで生活ができる。好きな友達や保育者がいる。保育者と十分かわれる。いつもと保育形態が同じで安定しているといった項目が共通の事柄として明らかとなった。尚、選択肢として物的環境に関する項目が多くあったにもかかわらず、保育者は子どもの生理的欲求の充足や保育の人的環境に関する項目により注目していることも明らかになった。

## (2) 保育者の疲労と保育

子どもの状態の捉え方に影響する疲労感に関しては、仕事をしているときに疲れを感じる保育者が全体の8割を占める。正規保育者は非正規保育者より「特に疲れを感じる」割合が2倍以上であり、疲労感をより強く感じている傾向にある。また、疲労は保育に影響すると認識しており、「疲労感によりゆったりと関われない、判断力の低下、子どもを注意することが増える」といった影響を上げている。特に正規保育者はこの傾向が強く、4割が短時間(すぐ・翌日)に疲労が回復しない傾向にあった。疲労及び疲労が回復しない原因として、仕事量の多さ、特に時間外・持ち帰りの仕事(保育の記録・計画行事教材準備等)が多い事、期限付きの仕事、休暇・休憩の取りづらさ・評価の低さがあげられ、正規保育者の負担の重さが明らかになっている。また、疲労感は0歳児クラス担当よ

りも1・2歳児クラス担当の方が高かった。

また、0, 1, 2歳児保育を3, 4, 5歳児保育と比較すると、以下のような特徴が明らかとなった。健康・安全・衛生面への配慮が一日を通じて絶え間なく、日々緊張の連続であること。一人一人の対応に多くの時間を要し、生活援助における対応が小刻みであるため、保育者自らは食事やトイレの時間を犠牲にしても対応していること。泣きやぐずり等の子どもの気持ちに応える努力をしているが、個々の対応が十分にできていないというジレンマを感じていること。個々の生活リズムに沿った対応を心がけるがために、まとまった休憩時間がとりにくく、疲労回復をする時間が持ちにくいことなどである。

更に、一日の内で一番大変さやイライラを感じる時間帯は、「食事から午睡」「遅・延長番」の時間帯であり、個別対応や保護者対応の多い時間帯であった。条件整備すべき重要な時間帯が明らかとなった。

(3) 保育者の状態が保育へ与える影響について(保育者の状態と子どもの状態の捉え方との関係)

保育者の心理的状态(疲労・やりがい)と子どもの状態(安定状態・不安定状態)の捉え方の関連について検討を行うため、分散分析(独立変数:保育者の疲労とやりがいの各平均値を基準とした低群・高群、従属変数:子どもの安定・不安定状態得点)を行った。

その結果、Figure1より疲労が高い保育者は、疲労が低い保育者よりも子どもの状態を不安定状態と捉えやすいこと(相関係数0.18 ( $P<.001$ ))、やりがいが高い保育者はやりがいが低い保育者よりも子どもの状態を安定状態と捉えやすいこと(相関係数0.14 ( $P<.001$ ))が示唆された。尚、保育者の疲労と子どもの安定状態の関係については分散分析による有意差はみられるものの、相関係数は-0.06 ( $P<.001$ )であったことから、

関連は低いと考える。つまり、保育者のポジティブな状態は子どもの捉え方にポジティブな影響を、保育者のネガティブな状態は子どもの捉え方にネガティブな影響を与えたと考えられる。保育に対する自由記述の内容より、保育者は、「自分の元気がないと、いい保育はできない。」等の自身の状態が保育や子どもの状態に影響することを考慮しつつも、「たとえ疲れていても態度には出さずに仕事をするよう心がけている。」「疲れる事もあるが、それを子ども達に感じさせないようにしていかなければと思いながら仕事をしている。」等のように、保育者自身の状態を保育には影響させてはいないという専門職としての意識が見受けられた。しかし、本結果より保育者の心理的状态が子どもの状態を適時適切に判断する養育姿勢に影響していることが客観的に示されたといえる。

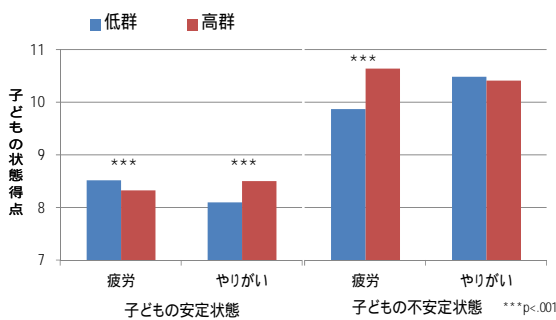


Figure1 保育者の状態と子どもの捉え方の関連

#### (4) 保育者の疲労軽減要因について

疲労の軽減に効果がある 19 項目の内容について調査を行った。因子分析の結果、「良好な人間関係」「プライベートの時間確保」「業務内容の見直し」「適切な仕事量」「仕事にあった報酬」「適切な物理的環境」「余裕のある保育」の 7 つの内容にまとめられた。また、分散分析 (独立変数: 年代、従属変数: 各疲労軽減要因の得点) より、年代による有意な差異が示され、20 代・30 代の保育者は 40 代以上の保育者よりも「良好な人間関係」「プライベートの時間確保」が疲労軽減に効

果的な内容とされること、30 代以上の保育者では「業務内容の見直し」が疲労軽減に効果的な内容とされることが示唆された (Figure 2)。さらに、分散分析 (独立変数: 正規・非正規区分、従属変数: 各疲労軽減要因の得点) より雇用形態による有意な差異も示され、正規保育者は非正規保育者よりも「業務内容の見直し」が、非正規保育者は正規保育者よりも「プライベートの時間確保」が疲労軽減に効果的な内容とされることが示唆された (Figure 2)。

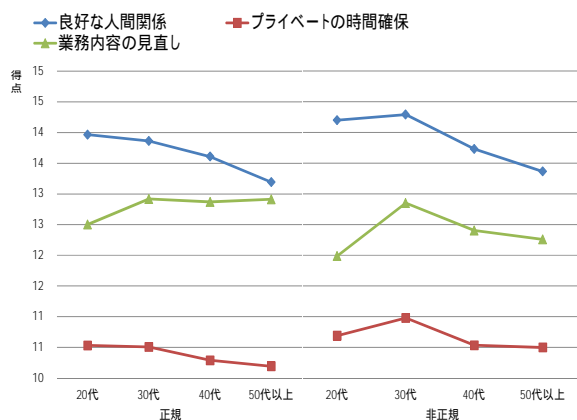


Figure2 年代・雇用形態別の疲労軽減要因

20 代・30 代の保育者は 40 代以上の保育者よりも「良好な人間関係」「プライベートの時間確保」が疲労軽減に効果的な内容とされることが示唆された (Figure 2)。さらに、雇用形態による有意な差異も示され、正規保育者は非正規保育者よりも「業務内容の見直し」が、非正規保育者は正規保育者よりも「プライベートの時間確保」が疲労軽減に効果的な内容とされることが示唆された (Figure 2)。

#### (5) 保育規模が保育者の疲労や保育の質 (子どもの状態の捉え方) に与える影響について

保育規模 (1 クラスの子どもの人数) が保育者の疲労及び保育の質 (保育者の子どもの

状態の捉え方)に与える影響を検討した。分散分析(独立変数:クラス人数区分、従属変数:保育者の疲労得点及び子どもの安定・不安定状態得点)の結果、6人~8人の規模が最も保育者の疲労が低く、5人以下や18人以上では疲労が有意に高くなることが示唆された(Figure3)。また、6人~8人の規模に比べ他の人数の規模では、子どもの状態を一樣に捉え、個別の状態が捉えにくくなる傾向にあることが示唆された(Figure4)。この傾向は、特に18人以上の規模になると顕著であり、クラス別では1歳児クラスでのみ有意な差が認められた。

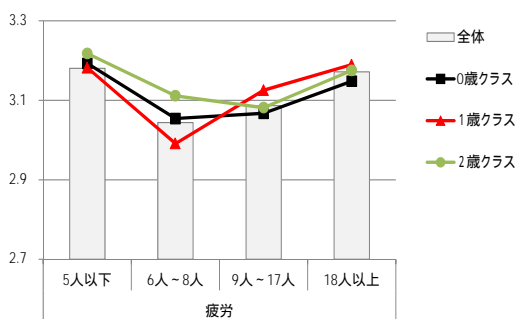


Figure3 保育規模と疲労の関連

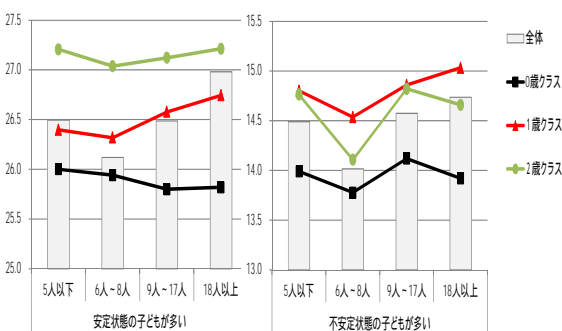


Figure4 保育規模と子どもの安定・不安定状態の捉え方の関連

(6) おわりに

以上の結果より、以下の三点が明らかとなった。

第一点として、保育者の疲労感が子どもの状態を適時適切に判断する養育姿勢に影響を与えていることから、保育の質を保つため

に保育者の疲労感の低減が必要である。子どもをポジティブに捉える姿勢を持ち続けられる仕事の環境を維持することによって、保育内容の充実を図ることができるという、質を保つための重要な側面が明らかになった。

第二点として、疲労感の原因と疲労感の軽減に効果的な内容は必ずしも一致しないが、原因となっている記録事務の多さや、子ども及び保護者対応の質を維持するための努力や責任の重さに対して、職員間の連携や共通理解、休憩時間の取得や業務内容の見直しといった疲労感軽減に効果的とされる要因への取り組みが有効であることが明らかとなった。その取り組みにおいては、年代や雇用形態による違いを踏まえることが重要である。尚、今回の調査では、やりがいによって疲労感が軽減できるわけではないことが示唆されていることから、子どもの心身の安定を図るには、上述の内容を日々の保育において確保し、保育現場が取り組んでいくことが肝要といえる。

第三点として、クラス規模が、疲労感及び子どもの状態の判断に影響することから、0~2歳児保育においては6~8人を一つの基準とし、18人以上の子ども集団の取扱いに関しては慎重に検討する必要があることが示唆された。保育体制の見直しによる保育の質の維持には複数担任の保育者の年齢・経験のバランスが重要であることも明らかとなった。尚、保育室にトイレが併設されている方が疲労感低く、また、1部屋で食事・睡眠・遊びを工夫しているほうが疲労感低いという結果も一部得ており、小グループで落ち着けるコーナーを作って生活していく保育空間構成の重要性及び物理的な保育環境整備についても示唆された。今後の更なる研究課題と捉えられる。

保育の質に保育者が重要な役割を果たすことが指摘されるなかで、保育者の疲労軽減、という問題は保育の根幹に関わるものとし

て意識されねばならない。本研究において、現場で取り組むべき課題の根拠を得ることができたと考える。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計1件)

西智子他、子育て支援と乳幼児の遊び、子育て支援と心理臨床、査読無、vol8、2014年1月、50-56

〔学会発表〕(計7件)

宇佐美尋子、高橋健一郎、西智子、高尾公矢、保育者の心理的状态と子どもの安定、日本心理学会77回大会、2013年9月20日、札幌コンベンションセンター

高橋健一郎、宇佐美尋子、西智子、津留明子、赤坂榮、保育者の疲労感と子どもの安定、子ども家庭福祉学会第14回大会、2013年6月2日、立正大学

高橋健一郎、西智子、津留明子、高尾公矢、保育者は子どもの心身の安定をどのように捉えているのか、全国保育士養成協議会第51回研究大会、2012年9月7日、京都文教大学

西智子、津留明子、高橋健一郎、高尾公矢、加藤敏子、保育者からみた0,1,2歳児保育～A県の低年齢児担当保育者のアンケートから～、全国保育士養成協議会第51回研究大会、2012年9月7日、京都文教大学

高橋健一郎、西智子、津留明子、保育者の疲労と保育について、子ども家庭福祉学会第13回大会、2012年6月3日、大阪府立大学

津留明子、西智子、子育て支援者への取り組み 地域行政との連携から、全国保育士養成協議会第50回研究大会、2011年9月9日、富山県民会館

西智子、津留明子、大学の子育て支援センター利用者の子育て意識、子ども家庭福祉学会第12回大会、2011年6月6日、熊本学園大学

〔図書〕(計3件)

西智子他、小児医事出版、実践保育学、2014年、77-94、131-148

津留明子他、萌文書林、保育課程論、2013、90-115、164-186

西智子他、萌文書林、子どもと教育の原理2011、162-175

## 6. 研究組織

### (1)研究代表者

西 智子 (NISHI, Tomoko)  
聖徳大学・心理・福祉学部・教授  
研究者番号：70383445

### (2)研究分担者

高尾 公也 (TAKAO, Kimiya)  
聖徳大学・心理・福祉学部・教授

研究者番号：50167483

高橋 健一郎 (TAKAHASHI, Kenitiro)  
聖徳大学・児童学部・講師  
研究者番号：10588122

宇佐美 尋子 (USAMI, Hiroko)  
聖徳大学・心理・福祉学部・助教  
研究者番号：30581962

津留 明子 (TSURU, Akiko)  
聖徳大学・児童学部・准教授  
研究者番号：30439004